

## 「鞍馬天狗」と絵画

京都聖母女学院短期大学名誉教授 藤岡道子

人気曲「鞍馬天狗」。前半は鞍馬寺での花見の場。寺に寄宿して学ぶ大勢の稚児たちは平家の名門の少年たちだが、ひとり源氏の少年牛若がまじっている。父の源義朝は平治の乱で平清盛と戦って敗死、牛若は鞍馬寺に預けられていたのだ。華やかな春の景のなかで不遇の少年はひとり残され不審な山伏と出会う。少年に同情した山伏は通力を以って幾内の花の名所を見せて回り、やがて自分はこの山に住む大天狗であると名乗って消え失せる。

後半、大天狗は牛若に兵法を伝授する。牛若がやがて平家を討ち滅ぼすことを予言し、合戦の守りとなると約束して再び飛行して消える。

音阿弥(世阿弥の甥で当代の名優。1398～1467)の上演も知られる古い作品である「鞍馬天狗」は今日まで長く人気曲である。あらすじをたどるだけでも人気の由縁は理解されるが、さてその主題はなんだったのだろうか。

人気の由縁を『謡曲大観』(佐成謙太郎 1930初版)の解説から考えてみる。

- ・ 先づ最初の花見の宴は世に思ふ事のない華麗な情景
- ・ 第二段は大天狗が真の姿を現して、一代の麒麟児牛若丸に兵法を授けるといふ豪壮な場面
- ・ 題材の興味、舞台面の變化、情理の周到、世阿弥以後の作としては傑出したものといふべき

また『能楽手帖』(天野文雄 2019刊)では

- ・ 大勢の稚児の登場、アイの活躍、山伏の牛若への同情を稚児趣味と重ねるウィット、卓抜な舞台処理、洗練された詞章からなる名曲である

と解く。新旧の研究書はみな悲運の貴公子への心寄せと、敗者源氏の逆転勝利の予祝という見どころが「傑出」「名曲」と称される理由であるとしている。

さらに主題について考える。作者の作意というより、この曲がどのように読まれてきたかという意味での主題だが、『日本古典文学大系 謡曲集』(横道萬里雄・表章 1963初版)は次のように書く。

- ・ 前場では、花のもとに恋を語る孤独な山伏と美少年を描き、後場では、黒々とした谷間で兵法にはげむ未来の智将と守護者の怪人を描く。童話風な靈驗能である。

また『岩波講座能狂言Ⅳ 能鑑賞案内』(小山弘志編 1989刊)には・ 前場では花盛りの桜のもとで孤独な二人が心を通わせ、後場では大天狗の豪快な動作が演じられる。山伏と少年牛若との恋は、稚児愛翫の時代相を反映するものである。

とある。両書とも主題を明白に「恋」と言い切っている。

判官の少年期の悲劇的な物語が花と恋に彩られて展開する。これが能「鞍馬天狗」であった。稚児趣味も山伏と美少年の恋も、現代

人には少々耳遠いが、これが理解できなくては「鞍馬天狗」を正しく理解鑑賞することはできないだろう。ふたたび謡曲本文をひらくと次のあまりに美しい文に出会い目がくらむようだ。

「さても沙那王が立立には、肌には薄花桜の単に、頭紋紗の直垂の、露を結んで肩に掛け、白糸の腹巻白柄の薙刀、例へば天魔鬼神なりとも、さこそ嵐の山桜、花やかなりける出立かな。」

不遇の牛若のまとう桜色に匂う白地薄絹の衣、白い鎧に白い薙刀、少年の武装姿でこれほど清らかなエロスにみちた表現があったろうか。

前説が長くなつたが、「鞍馬天狗」を描いた江戸時代の絵画をみていきたい。

「鞍馬天狗」を描く絵画でもっとも古いのは「洛中洛外図屏風」(東京国立博物館蔵 旧称舟木本 国宝)の点景として四条河原での演能図。図A

舞台を後方から俯瞰して描く。野外の舞台に鏡板はまだ無い。牛若の出立は白ずくめではない。江戸初期の演出か。観客が後場の名場面を食い入るようにつめている。大天狗も牛若を見つめている。

図Bは「能絵鑑」(宇和島伊達文化保存会蔵)の中の一図。徳川家宣(1662~1712)側近の狩野派の絵師筆と考察されている名品。牛若は白水衣で、これが江戸時代將軍家に鑑賞された出立であった。白ずくめであるのは詞章通り。大天狗が牛若の薙刀を持って舞っているのは異時同図の構図である。

図Cは同時代の狩野柳雪(1647~1712)の作品。柳雪も

將軍家に関わりの深い狩野派の絵師であるので、舞台の写実と考えられる。図Bと同じ描き方でないのが面白い。表着は唐織のようで、このような演出もあったのだろう。牛若の顔貌は豊頬色白の稚児顔である。

図DはMIHO MUSEUM新収蔵の演能図屏風の一図、土佐光貞筆、1792以降制作。図Eは生駒市宝山寺の迎賓館の襖絵の一図、土佐光孚筆、1840年代制作。光貞、光孚は親子で、土佐派正系の絵師。

牛若の衣装が親子でも違うのは実写によつたためか。土佐派の大天狗は薄幸の牛若を気の毒そうに見つめている。

最後に参考にご二点。まず近代の絵師になるが月岡耕漁(1869~1977)の「能楽図絵」の一図を挙げる。図F。牛若は江戸時代の絵に近い。大天狗は白頭、大兜巾、掛絡、鹿背杖、背に羽団扇を差す。面は大癡見。

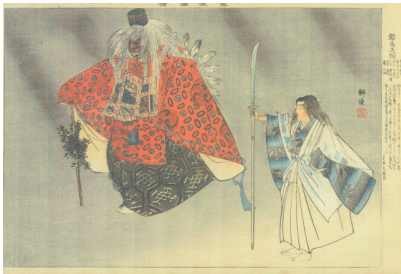
図Gは今年の廣田観賞会のチラシ。「鞍馬天狗」の小書「白頭」に用いる癡見恵尉面を中央に、大天狗と牛若のイラスト。牛若の顔は廣田明幸の写真がはめこまれている。空中に舞う大天狗の顔が面面でないところが楽しい。大天狗と牛若が見つめ合っている。江戸時代の能の絵画の伝存例は実は数多くない。「鞍馬天狗」の絵画もまた少ない。しかし「恋」という主題からこれらの稀少な絵画を眺めてみると、また気づかなかった感興が湧くのを覚えるのである。



↑ 図 B : 「能絵鑑」(宇和島伊達文化保存会蔵)



↑ 図 C : 狩野雪筆「能之図」(国立能楽堂蔵)



↑ 図 F : 月岡耕漁筆「能楽図絵」



↑ 図 G : 「第31回廣田鑑賞会」チラシ



↑ 図 E : 同狐大図



↑ 図 E : 土佐光守筆「迎賓館(獅子閣)横絵」  
(宝山寺蔵)



↑ 図 D : 土佐光貞筆「演能図屏風」  
(MIHO MUSEUM 蔵)



↑ 図 A : 「洛中洛外図屏風」(東京国立博物館蔵 旧称舟木本 国宝)